

遊びの中で育まれる子どもの学び

－ 5歳児の遊びの姿から －

中 村 共 芳 [鹿児島大学教育学部附属幼稚園]

Child learning fostered through play: By watching a five-year-old child play

NAKAMURA Tomoka

キーワード：保育、子どもの遊び、学びの見取り、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

1. はじめに

平成30年度から、新幼稚園教育要領が施行された。その中で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿が示された。また、平成32年に改訂となる小学校教育要領では、幼児教育とのつながりについても触れられ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて1年生の各教科の学習を進めていくように示された。幼児教育の現場では、これまで以上に、遊びの中にどのような学びが見られるのかを見取る力が求められ、更にその見取った子どもの学びを伝えていく必要性を感じている。

そこで、本報告では、5歳児の遊びの中で、どのような学びが見られるか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点としてまとめることにした。

2. 5歳児事例「セミとの関わり」

2.1. この時期の保育について

教育課程 年長児Ⅲ期（8～10月）

ねらい

- 友達とのつながりを深めながら、いろいろな遊びを工夫する。
- 体を十分に動かして、遊ぶ心地よさや楽しさを友達と一緒に味わう。

内容

- 戸外で体を思い切り動かしながら、運動的な遊びの楽しさを存分に味わう。
- 自分たちで工夫して園生活を楽しもうとする。
- チームに分かれたり、ルールを意識したりしながら、運動的な遊びを楽しむ。
- 友達と役割を分担したり、協力し合ったりして遊びを進める楽しさを味わう。
- 季節の移り変わりや生き物、草花に関心を持ち、身近な自然を遊びの中に取り入れて楽しむ。
- 自分の気持ちを相手に伝え、相手の思いも聞きながらごっこ遊びやゲームを楽しむ。


2.2. 幼児の実態

夏休みが終わり、子どもたちは久しぶりの園生活を楽しみに登園していた。身の回りのことなどは、思い出しながら自分で進めていく姿が見られ、夏休み前にしていた遊びに再び取り組む子どもたちも多かった。一つの遊びに多くの子どもたちが加わり、たくさんの人数で遊ぶ姿が増え、遊びを進めていく中で、互いの発見や考えを伝え合いながら、「次はこうしてみよう。」と自発的に遊びを進めている子どもたちであった。

園庭では、虫捕り網を手に持ち、どこに虫がいるか予想しながら虫を探しに行く子どもが多く見られた。ハンミョウやトンボを探したり、捕まえたチョウなどを友達と見せ合ったりする姿が見られた。また、「チョウを捕まえたけれど、羽が破れていたから逃がした。」などのやりとりも聞かれ、虫捕りを通して、生きものを大切にしようとする気持ちが育まれてきていると感じていた。教師も子どもと一緒に虫捕りをしながら、見付けた虫の体の特徴を捉えたり、友達の捕まえた虫との比較をしたりして、子どもたちが、生きものに関心をもつことができるように心掛けた。

2.3. 保育の実際

◇ 「セミを見付けたよ」

遊びの実際	子どもの学び
<p>園庭で虫捕りをしていた子どもたち。A児とB児がセミを見つけて教師へ見せた。</p> <p>A児「先生！セミがいたよ！」</p> <p>教師「本当だ。セミだね。」</p> <p>B児「僕も見付けたんだよ。」</p> <p>教師「本当だ。この2匹は同じセミなの？」</p> <p>A児「これはアブラゼミだよ。」</p> <p>教師「これ、アブラゼミか。じゃあ、こっちはなんだろうね。」</p> <p>B児「セミだよ。」</p> <p>C児「これもアブラゼミじゃない？」</p> <p>話をしていると、A児がその場を離れた。他の子どもたちがセミを見ながらそれぞれの考えたこと伝え合っていた。</p> <p>B児「先生見て！赤い点があるよ。」</p> <p>教師「どこどこ？」</p> <p>B児「ほら。鼻のところ。」</p> <p>C児「見せて見せて。どこ？」</p> <p>B児「ほら。(指で目と目の間の赤い点を指しながら)目の横のここ。」</p> <p>C児「本当だ。3つある。」</p>	<p>○ 園庭で見付けた虫を友達と共有しようとする。</p> <p>【健康な心と体、自然との関わり・生命尊重】</p>  <p>○ セミの体をよく観察し、セミの違いに気付く。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚,自然との関わり・生命尊重】</p>

【考察】

園庭で見つけたセミを見せ合っていた A 児と B 児。アブラゼミのことは知っていた A 児と B 児だったが、別の種類については知らない様子であった。近くにいた C 児も加わり、もう 1 匹もアブラゼミではないかという予想を立てつつ、セミの体をじっと見つめていた。すると、B 児が顔の所に 1 ミリほどの赤い小さな点が 3 つあることに気付いた。C 児がどこにあるのか見つけられないでいると、B 児は指で点の近くを指し、“目の近く”という目印も伝えながら B 児が C 児に赤い点の場所を教えていた。教師もその場で一緒にセミを見ながら、共に驚いたり、共感したりして、子どもの気付きを促すことができるようにした。

◇「図鑑で調べてみよう」

遊びの実際	子どもの学び
<p>B 児と C 児がセミを見ながら話をしていると、その場を離れていた A 児が、保育室から走って戻ってきた。手にはアブラゼミの図鑑を持っていた。</p> <p>A 児「持ってきたよ。」</p> <p>教師「アブラゼミの図鑑，探して来てくれたんだ。見てみよう。載っているかな。」</p> <p>始めのほうは，アブラゼミの成長の様子がかかれていたが，最後のほうのページに，数種類のセミが描かれているページがあった。A 児はみんなが見えるようにそのページを広げ，じっと見始めた。</p> <p>A 児「(アブラゼミの写真を指し) アブラゼミあった。」</p> <p>教師「そうだね。羽の色も似ているね。」</p> <p>C 児「(もう一匹は) これじゃない？ほら。羽が同じ。」</p> <p>C 児が，クマゼミを指指した。</p> <p>B 児「うん。これだこれだ。」</p> <p>C 児「赤い点々もあるよ。」</p> <p>教師「クマゼミってかいてあるね。確かに，羽の色がアブラゼミと違って透明で，赤い点々もあるね。」</p> <p>D 児「何してるの？」</p> <p>教師「A くと B くんがセミを見つけたら見ているの。えーっと，どっちがどっちだったっけ？」</p> <p>A 児「こっちがアブラゼミで，こっちがクマゼミだよ。」</p> <p>教師「そうだった。茶色い羽がアブラゼミで，透明の羽がクマゼミだったね。」</p>	<p>○ もっと詳しく知りたいたと，セミの図鑑を探して持って来る。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚 自然との関わり・生命尊重】</p> <p>○ 数人で一つの図鑑の同じページを見る。</p> <p>【道徳性・規範意識の芽生え, 数量や図形,文字等への関心・感覚】</p> <p>○ セミの絵本と見つけたセミを見比べる。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚 自然との関わり・生命尊重】</p> <p>○ 2 種類のセミの違いを認識して，伝える。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚 言葉による伝え合い】</p>

【考察】

見付けたセミを観察していると、A児が「アブラゼミ」の図鑑を探して持ってきた。これまでの経験から、虫や動物、草花など分からないものがあつたときに、図鑑を見て調べたらいいということを知っており、自分でセミの図鑑を探して持ってきた。“アブラゼミ”の図鑑ではあつたが、最後のページに数種類のセミの写真と説明がかかっているページがあり、そのページを開いて、写真とセミを見比べ始めた。数種類のセミの中から、羽と赤い点を手掛かりにクマゼミだと見つけ出した。教師は、図鑑と見比べた子どもの気付きを繰り返すことで、判断の理由を共有できるようにした。こうして、図鑑を見たら、解決できるという経験に、どのように図鑑を見たらよいか、という体験を加えていけるようにした。


◇「セミの大きさはどのくらい？」

遊びの実際	子どもの学び
<p>教師は2種類のセミについて、図鑑の説明書きを声に出して読んだ。</p> <p>教師「セミの体長、体の大きさは、6～7センチメートルくらいなんだって。」</p> <p>B児「これ（持っているセミ）は、どれくらい？」</p> <p>教師「測ってみる？」</p> <p>C児「うん。うん。」</p> <p>教師「じゃあ、定規取ってくるね。ちょっと待ってて。」</p> <p>教師が定規を取りに行き戻ってくると、全員セミを見ながら待っていた。</p> <p>教師「お待たせ。どれどれ。5.5センチメートルだね。」</p> <p>D児「セミの身体計測だね。」</p> <p>教師「本当だ。この前みんなも『どれくらい大きくなったかな』って身体計測したね。かかとぺったんして測ったよね。」</p> <p>A児「じゃあこっち（クマゼミ）は？」</p> <p>B児「あ。ちょっとずれてる。」</p> <p>B児は、セミの羽の先を、定規の“0”の目盛りに合わせるように少し動かした。</p> <p>教師「そっか。みんなと一緒に0に合わせて測らないといけないね。えーっと、クマゼミは5センチメートルだ。」</p> <p>C児「5センチだって！」</p>	<p>○ セミの大きさに興味をもち、測ってみようとする。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚 自立心】</p> <p>○ 自分の体験とセミの計測を結びつけて考えた。</p> <p>【豊かな感性と表現 健康な心と体】</p> <p>○ セミの大きさを測るときに、0の目盛りに揃えたほうがいいことに気付いた。</p> <p>【数量や図形,文字等への関心・感覚 思考力の芽生え】</p>

【考察】

図鑑にセミの体長がかかれていたことから、長さを測ることになった。これまで定規を使ったことはなかったが、よい機会であると考え、教師が定規を取りに行き、子どもたちと測り始めた。すると、“セミの身体計測”という言葉が出てきて、前々日に自分たちが身体計測をした経験と結び付けていた。セミと自分の体験を結び付けて考えるところは、園児ならではの発想であり、身体計測という言葉を使うことで、その場の全員が“セミの大きさを測っている”という、同じイメージをもつことができたと考える。教師は、目盛りが揃っていないことに気付いていたが、直接目盛りに合わせることはせず、身体計測で使った“かかとぺったん”という表現を出してみた。すると子どもは、かかからセミの羽の先へと意識をつなげ、羽の先を0の目盛りに揃えることに気付いた。教師はその気付きを認め、0に合わせて測った。子どもの体験と結び付けながら遊びを進めることで、そうした気付きや工夫が、より子どもの意識に残ると考える。

◇「紙にかいてみんなに知らせたい」

遊びの実際	子どもの学び
<p>A 児「先生、紙に“あぶらぜみ”ってかいてみんなにも教えてたいな。」</p> <p>教師「いいね。じゃあ、紙にかきにいこうか。」</p> <p>B 児「僕かけない。」</p> <p>教師「じゃあ先生と一緒にいこうか。」</p> <p>A 児と B 児は、教師と一緒に3人で保育室へ入り、教師が画用紙とペンを渡すと、A 児が“アぶらぜみ”とかいた。かき終えた A 児からペンを受け取った教師は、B 児にペンを渡した。</p> <p>教師「くまぜみの“く”はこれだね。」</p> <p>教師が“れんらくちょう”の表示の“く”を指した。すると、B 児が“く”をかき、続けてゆっくりと“まぜみ”とかいた。</p> <p>教師「B くんかけたね。よし、これでみんな分かるね。」</p>	<p>○ 見付けたセミを掲示して友達に伝えようとした。</p> <p>【豊かな感性と表現、言葉による伝え合い】</p>  <p>○ 知っている文字を思い出しながら、セミの名前をかいた。</p> <p>【数量や図形、文字等への関心・感覚言葉による伝え合い】</p>

【考察】

セミの種類が分かった A 児と B 児は、他の友達にも知らせたいと考えた。紙にかいて掲示することを思いつき、かくことにした。ひらがながある程度かける A 児は、積極的にかこうとしていたが、年長になって文字に興味を持ち始めた B 児は、「僕かけない。」と、消極的であった。教師は、B 児が自信がない様子であったので、一緒にかくことで、伝えることの楽しさやかくことへの自信をもつことができたらと考えた。一緒にかこうと、“くまぜみ”の“く”は文字を示したが、

かき始めると続けて“くまぜみ”とかいた。“ぜ”が鏡文字だったが、B児に必要なことは、鏡文字を指摘し正しく直すことではなく、自分でかけたことの喜びを共感することであると考えた。そのため、B児が自分でかくことができたことを認め、そのまま掲示することにした。A児も“アぶらぜみ”という平仮名と片仮名が混ざった表記であったが、そのまま掲示した。

「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」に文字への興味・関心も含まれているが、これは、正しい知識を身に付けることではなく、「文字を使ったら相手に伝わる」ということを知り、「かいたら相手に伝わった」という喜びを感じることにあると考える。幼児期の遊びの中で、こうした、「伝えたい」という気持ちを大切に、その子の興味に合った関わりをしていきたい。

◇「どうしたらひっくり返らないか」

遊びの実際	子どもの学び
<p>セミの名前をかき終えた A 児と B 児の 2 人は、セミを透明のケースに羽が見えるように入れて掲示しようとした。しかし、セミのお腹部分が丸く、ひっくりかえってしまった。</p> <p>教師「ひっくりかえっちゃうね。」</p> <p>A 児「草を入れたらいいんじゃない？」</p> <p>教師「なるほど。草を入れたらひっくり返らずに入れられるかもね。」</p> <p>A 児と B 児は、草を取りに行き、取ってきた短い草を入れ物に敷き、その上にセミを置いた。すると今度は羽が見える状態で収まった。</p> <p>教師「おお。草を入れたらくるんとならないね。これなら見やすいね。」</p> <p>B 児「みんなにも、(セミ) 教えてあげようよ。」</p> <p>教師「そうだね。ちょうど片付けの時間だから、帰りにみんなに教えてあげよう。」</p> <p>2 人は降園活動に向けて片付けを始めた。</p>	<p>○ セミがひっくり返らずにケースに置く方法を考え、草を取りにいった。</p> <p>【思考力の芽生え 自立心】</p> <div data-bbox="1002 1151 1425 1413" data-label="Image"> </div> <p>○ 知ったことを友達に伝えようとした。</p> <p>【協同性、言葉による伝え合い】</p>

【考察】

セミをケースに入れて掲示しようとしたが、ひっくり返ってしまった。A 児は、どうしたらセミがひっくり返らずに置くことができるか考え、下に草を敷くことを思いついた。教師は、子どもが草を取りに行ったことを改めて言葉にすることで、なぜ草を入れたのか、行動に意味づけをするようにした。遊びの中の小さな工夫を教師が認め、言葉に表すことで、子どもが自らの行動を振り返り、認識することができる。と考える。

◇ 「捕まえた？見付けた？」

遊びの実際	子どもの学び
<p>降園活動で、その日の楽しかったことを発表する時間に、A児とB児が全員の前に立ち、セミを見付けた話をし始めた。</p> <p>A児「今日は、セミを捕まえました。」</p> <p>E児「生きてるの？」</p> <p>B児「いや、死んでる。」</p> <p>F児「だったら見付けました、じゃない？」</p> <p>教師「そっか。生きていたら“捕まえた”というけれど、死んでしまっていたら、捕まえた、とは言わないのかな。“見付けました”なら、どちらでも使えそうだね。」</p> <p>A児「セミを見付けました。」</p> <p>教師「何ているセミですか。」</p> <p>B児「アブラゼミとクマゼミです。」</p> <p>A児「5センチです。」</p> <p>教師「長さも測って見たんだよね。そしたら5センチ、これくらい（指で5センチ幅を示す）でした。みんなも近くで見てみてね。もし、他のセミがいたら、またみんなも教えてね。」</p>	<p>○ 全員の前で楽しかったことを発表した。</p> <p>【協同性、言葉による伝え合い】</p> <p>○ 生きているセミと死んでいるセミの表現の仕方について意見を出し合った。</p> <p>【自然との関わり・生命尊重 言葉による伝え合い】</p> <p>○ 見付けたセミの大きさについて、知っていることを友達と共有した。</p> <p>【自然との関わり・生命尊重、 数量や図形、文字等への関心・感覚】</p>



【考察】

降園活動で、見付けたセミについてA児とB児が発表を始めた。すると、死んだセミは“捕まえた”という表現でよいのか、疑問の声が挙がった。子どもたちの中で、生きているものと死んだものの違いを認識できていることが分かった。教師は、国語辞典での意味を詳しく伝えることよりも、生きているものと死んでいるものには違いがあるということと、どちらでも使うことができる、“見付けた”という表現を全体に伝えることにした。そして、見付けたセミについて詳しく伝えることで、翌日への遊びへとつながるようにした。

◇ 「今日もセミがいたよ」

遊びの実際	子どもの学び
<p>翌日、B児とG児が死んだセミを手に持って登園した。</p> <p>G児「先生、おうちにセミがいたよ。」</p> <p>教師「本当だ。これは、何ゼミかな。」</p> <p>B児「これもクマゼミだよ。門のところにいたよ。」</p> <p>G児「うーんと。。 ちょっと見てみる。」</p>	<p>○ 家庭でも園での遊びを思い出し、セミを見付けて持ってきた。</p> <p>【自然との関わり・生命尊重、 自立心】</p>

<p>G 児は、保育室に掲示してある、前日見付けた2匹のセミを見に行った。</p> <p>G 児「先生、クマゼミだよ。」</p> <p>教師「そうか。羽がクマゼミと同じだもんね。」</p> <p>G 児「こっちが小さいね。」</p> <p>B 児「これも一緒に並べておこう。」</p> <p>G 児「これは僕のだけど・・・でも置いておこうかな。」</p> <p>G 児と B 児は、前日のセミと並べて置き、周りの子どもたちも一緒に見た。</p>	<p>○ セミを見比べて、似ているところや違いに気付く。</p> <p>【自然との関わり・生命尊重、自立心】</p> <p>○ 自分が見付けたけれど、みんなが見えるように、掲示する。</p> <p>【道徳性・規範意識の芽生え、自立心】</p>
--	---

【考察】

セミについて降園活動で発表した翌日、朝から B 児と G 児が家や通園途中で見付けたセミを持って登園した。降園活動で紹介したことで、前日には見付けていなかった G 児も見付けてきて、遊びが広がったと考える。2人は、持ってきたセミが何セミなのか、図鑑ではなく前日に掲示したセミと見比べることで、クマゼミであると結論付けた。前日の経験をいかし、自分たちで疑問を解決していくことは、他の様々な場面でも大切なことであると考えられる。

2.4. 事例を通した子どもの学び

本事例では、セミを見付けた子どもが、セミに興味を持ち、種類や大きさなど詳しく調べようとし、調べたことを友達に紹介しようとするまでの2日間の様子をまとめた。A 児と B 児を中心に、気付いたことを伝え合う中で、他の子どもたちにも遊びが広がり、展開していった。教師の関わりとして、子どもの気付きを学びとして正しく見取ること、そして、その気付きをもう一度子どもに返していくことが大切だと考える。

3. おわりに

幼稚園の遊びの中で、子どもたちはたくさんのことを体験している。それらの体験を、教師が学びとして見取り、子どもたちの気付きや学びを深めることで、子どもたちにとって経験として身につけていく。そうして身に付けた経験は、小学校以降の教科教育へもつながっていくと考える。今後も、遊びの中で見られる子どもの学びを見取ることを大切にして、保育を行っていきたい。

参考文献

- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」(平成30年 フレーベル館)
- 津金美智子「新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園」(平成29年 東洋館出版社)
- 奈須正裕「小学校新学習指導要領ポイント総整理 総則」(平成29年 東洋館出版社)
- 田澤里喜「あそびの中で子どもは育つ」(平成30年 世界文化社)